

本格始動！

獣医師をメインとした動物救援活動実施

福島警戒区域内動物救援獣医師チーム (VAFFA311) 活動手記

http://vaffa311.com

獣医師 平野由夫 (ひらの動物病院院長)



メンバー集合写真



川内村村民体育センターでの夏堀団長挨拶



馬場獣医師挨拶

田嶋要本部長挨拶

7月16日(土曜日)

6時起床。強い陽射しのなか7時に郡山駅前に集合。メンバー表、日程表などの配布、夏堀団長からの指示などを受けた後、活動拠点となる川内村村民体育センターに向けて出発。約1時間半の移動を経て到着し、9時より朝礼開始。団長、馬場獣医師、福島原子力災害現地対策本部・田嶋要本部長からの挨拶があり、獣医師ならびにボランティアの方々との顔合わせ。朝礼終了時には震災において亡くなられた方々、動物たちに向けて、参加者全員で1分間の黙祷を捧げた。

参加獣医師15名、参加ボランティア30名、車両15台により8班が組織され、私の参加する第4班は、獣医師2名、日本人ボランティア2名、外国人ボランティア3名の計7名、車2台という編成となった。各班に分かれ、誓約と行程確認をすませた後、午前10時、8班各々が警戒区域内での

担当地域に分散した。第4班は出発地から30kmにある担当地域へ向い、救援依頼を受けた場所から順にチェックを始めた。道路の亀裂・陥没などもあり運転は慎重とならざるを得ず、また強い陽射しのなかでの捜索は体力を消耗したが、ボランティアの方々の動物保護に対する情熱は、目を見張るものがあった。残念ながら依頼を受けた場所では動物保護にいたらず、引き続き、通行路から見える犬舎などのチェック、動物の鳴き声に注意しながらの移動となったが、強烈な陽射しのため、徘徊する動物はほとんど見受けられなかった。

その後、猫を1頭保護。続いてボランティアの方々の熱心な捜索により、生後40日程度の子犬5頭を保護した。約30km離れた双相保健所でスクリーニング検査を受けるため、14時過ぎに国道6号線を北上開始。移動途中も動物の生活の痕跡が見られれば記録し、水



警戒区域内で保護した子犬

7月17日(日曜日)

午前3時半に起床し、郡山駅前に4時半集合。川内村に6時到着。朝礼後、準備が整った班から、順次、各々の担当地域に向けて出発。当第4班も、前日に目撃記録を残した箇所から保護活動を開始した。作業効率を高めるため、保護班F、記録・フードなど設置班Gとした。ボランティアの方々の素晴らしい働きにより、前日の子犬たちの母犬を保護するとともに、4頭の猫を保護。当日は警戒区域内での活動の他、

シェルターへの動物収容・確認、ID紐付け作業、健康チェック、ワクチン接種並びに外部寄生虫



子犬保護の翌日、同警戒区域内で保護された母犬

に対する投薬処置、隣県獣医師会を通じた動物病院への一時搬送といった随伴する処理の確実性が要求されたことから、昼をもって警戒区域内での活動を終了とし、双相保健所への移動を開始した。昨日同様

6号線を北上し、保健所での検査を経て、15時にシェルター到着。シェルターでもボランティアの方々が多数、散歩や清掃、保護動物の健康管理に懸命に従事しておられた。16時30分、保護動物の受渡しを完了。当チームの現地での活動を終了とし、ボランティアの方々と別れ、帰途について。

当チームの、今回の拡大的福島警戒区域内動物救援活動の目的は、警戒区域に留め置いてしまった動物たちに、再度、人との関わり・生活を取り戻してもらうことにある。しかしそれは、動物のためだけの救援活動ではなく、警戒区域内での感染症発生、動物同士の無秩序な繁殖、半野生化から、彼らを遠ざけることで、警戒区域という境界を取り除かれた将来、確実になされるであろう地域復興に向けての導入であると考ええる。報告を終えるにあたって、チーム所属獣医師、ボランティアの方々、活動を主導してくださった原子力災害現地対策本部をはじめ、福島県職員、福島県獣医師会および近隣の県獣医師会の先生方、シェルターの維持・管理に積極的に協力頂いている多くの有志の方々に感謝致したい。また、今回の活動と直接的な関わりは乏しくても、全国の警察や消防・自衛隊の方々、多くの自治体からも駆けつけて頂いた方がいることも忘れることはできない。ご支援頂いた皆様、心より感謝申し上げます。誠にありがとうございました。

※16-17日の福島警戒区域内動物救援獣医師チームの活動で保護された犬27頭、猫22頭。

20km。あなたにとって、どんな距離ですか？ 長いですか？ 遠いですか？

VAFF311 獣医師 東海林 綾



3.11の大地震からすでに4カ月が経過。人々の記憶の中で、だんだん過去のものになりつつある大震災。被災地に住んでいない人にとっては、節電という不便がなければ、やもすると忘れてしまいそうなほど、3.11以前の生活に戻っています。被災地も徐々に復興ムードが高まり、復興キャンペーンなども行われているこの頃ですが、一方で、4カ月前から時の止まってしまっている地域があることをご存知でしょうか。

地震の影響により原子力発電所がダメージを受け、立ち入り制限となってしまった、いわゆる警戒区域。この警戒区域は、原子力発電所から20km圏内を指しています。この20km圏内に居住していた人は復興はおろか、自分の家にも帰ることができずいます。この圏内では、街は3.11のままです…。

私は7月16日、17日の2日間、警戒区域内に残る動物の救護を目的とした獣医師チームの一員として、警戒区域内での犬及び猫の保護に行ってきました。その際に見た光景、感じたこと、地元の方から聞いたお話しは、今まで私が他の被災地で行ってきた復興支援活動の意味を考えさせられるものでした。

東北自動車道が、1週間ごとに直っていく手応えを感じていた一方で、警戒区域内の道路はひび割れ、液化化現象によりマンホール周囲が陥没していました。信号は所々ついています、人影はありません。ときどき行き交う車に乗る人たちは、白いタイベックという全身を覆う作業着に身を包み、フードをかぶり防毒マスクを着けていました。すれ違う車は工事車両か、一時帰宅の住民を乗せたバス、もしくは許可を得た車のみ。お店はもちろん閉まっていますし、どこの家にも人の気配はありません。映画に出てくるゴーストタウンのようです。

福島第一原発から10km圏内、第二原発から5km圏内の小高い丘の上にある、まだ建ててから4年しかたっていない、「丘の上ペットクリ

ニック」。院長先生と同じ班で保護対象動物を探しながら、先生の病院を見せていただきました。きれいな外観。外のダメージはほぼ見当たりません。病院の入口ドアに張り紙がありました。[XXちゃん、元気です。XXちゃん、生存]一時帰宅したときに飼い主さんが来たときのために貼っていったというその褪せた紙の色と破れ具合から、時の流れを感じました。

中は地震の影響で棚からカルテがすべて落下しており、いろいろなものが散乱。徐々に一時帰宅が行われるなか、先生の家はまだ一時帰宅を許可されていません。7月30日になるとのこと。ずいぶん先です。

ぼつりぼつりと、先生はお話しをしてくださいました。避難区域から来たというだけで、いわれない迫害を受けたこと。車に落書きをされたり、ガソリンを売ってもらえなかったりしたこと。復興ムードのなか、家にも帰れずに取り残されている気持ちがあること。地震・津波・原発という三重苦のなか、いつ家に戻れるのか不安なこと。この混乱に乗じて火事場泥棒のように空き巣に入る人がいること。災害だけでなく人間不信に陥るような状況であること。奥様と二人三脚で頑張ってきて、地域でも信頼される動物病院を、あの地震が奪い去って行きました。

避難指示が出たとき、すぐ帰れるだろうと思い、着の身着のまま、家族と逃げました。ペットのフレンチ・ブルドッグのカップルは妊娠中。3月13日に帝王切開の予定でした。3月11日に被災。3月12日に避難。その際、先生はペットのフレンチ・ブルドッグたちも置いて行きました。先生にはポリシーがありました。「連れて行くときはみんな連れて行く。預かっている子たち全員を連れていけないのに、自分のペットだけを連れていけない」。娘さんには、「お父さん、ひどい」と泣きつつかれ、怒られました。数日つもりで避難してから避難生活が1週間余りたったとき、心配になった先生は一人、一時帰宅します。妊娠していたフレンチ・ブルドッ

あなたは、やみくもに「被曝」などといっていますか？ 福島県産というだけで敬遠していませんか？ 4カ月もたったのだから、と思ってもう忘れてはいませんか？

20km。街は今も3月11日のままです。この中に閉じ込められた街は、住人の帰りをずっと待っています。住人も、待っています。帰れる日を。